

孤独と他者—レヴィナスの思想を通して—

Solitude and Others —Through the Thought of Lévinas—

藤井 奈津子

FUJII Natsuko

はじめに

文部科学省では、20年以上も前の1990年代初頭から不登校に関する調査研究を実施し、不登校児童生徒減少への取り組みを提言している⁽¹⁾。その結果、不登校の発生を未然に防止するため、現在多くの学校においては、児童生徒の「心の居場所」「絆づくりの場」となる魅力ある学校づくりが進められている。また、不登校児童生徒を支援する人員としては、教師以外にもスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーといった心理や福祉の専門家が配置され、支援の場についても、学校の保健室や相談室以外に、市町村の教育支援センター（適応指導教室）等との連携が推進されている。しかしながら、このような学校側の取り組みにもかかわらず、文部科学省の学校基本調査によると、2014年度(平成26年度)の不登校児童生徒数は小学校で2万6千人、中学校で9万7千人であり、依然として不登校児童生徒数は高い水準で推移している⁽²⁾。

精神科医の斎藤環によると、不登校から長期に及ぶひきこもり⁽³⁾に至るケースは少なくないという〔斎藤2012:31〕。しかし上記のような様々な取り組みにもかかわらず、学校が不登校の児童生徒たちの「心の居場所」とならないのであるならば、彼らの孤独を救うためには、現行の学校とは異なる形での人間関係の場が提供される必要があるだろう⁽⁴⁾。ところで、一般的に孤独の苦しみとは、集団への参加の欲求や他者からの承認の欲求が満たされないことから生じるものとされている。しかし、そのような社会学的・心理学的孤独が深まると、人はさらに存在論的孤独へ行き着くという〔作田:1998〕。そして筆者は、この存在論的孤独を理解することが、不登校の児童生徒たちへの支援に、新たな方向性を提示する手がかりになるのではないかと考えている。そこでこの小論では、フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナス (Emmanuel Lévinas) の思想を通して、存在論的孤独とは何なのか、またこの孤独はいかにして乗り越えられ得るのかということ、筆者なりに整理しておきたい。

1. 苦痛と孤独

以下では、レヴィナスの思想を初期・中期・後期と3つの時期に区分した上で、存在論的孤独の観点から、彼の思想の深化の過程を順に追っていき。レヴィナスは初期の『実存から実存者へ』〔Lévinas:1947=1996〕、『時間と他者』〔Lévinas:1948=2012〕において、〈存在〉と〈存在者〉とを区別し、〈存在者〉の根源的な孤独について次のように語っている。

まずレヴィナスは〈存在〉を水の流れのような動態と考えている。しかしそれはアンリ・ベルクソンのような絶え間なく創造へと向かう明るい流れではなく、そこから逃れることができず、またどこへ向かうともわからない暗い流れである。レヴィナスはそれを〈ある (il y a) 〉と呼び、不眠の夜に喩えている。この〈存在〉の流れの中から自らを同一性で囲む〈存在者〉=〈私〉が出現する。しかし、〈存在者〉は〈存在〉から完全に分離されるわけではない。〈存在者〉を〈存在〉という海の中に浮かぶ冰山と考えてみるならば、その水面上に見える部分と水面下に沈んでいる部分はそれぞれレヴィナスのいう自我 (moi) と自己 (soi) にあたり、自己は〈存在〉そのものとは異なるが、〈存在〉の流れの中に常に浸されているといえる。

さて出現したばかりの自我は、まだ外界の対象へ向かうまでにはいたらず、自我の底を流れる〈存在〉に浸さ

れた自己に注意を集中している。自我は自己からの出立と自己への回帰を繰り返しながら、みずからを同一性で囲い込むのである（＝自己同一性の活動）。しかし、自我はそうやっていつまでも自分の尾を追いかけるウロボロスの蛇に留まることはできない。自我はみずからの外へ向かい、さまざまな対象を自由に享受（jouissance）していく。この享受の活動は、諸要素の直接的な享受から、労働による所有を介して、表象にまでいたる。つまりここに＜存在者＞＝＜私＞による、＜私＞の世界が構成されるのである。

このようにレヴィナスにおいて＜私＞とはその起源において二重性をもつ。さまざまな対象を自由に享受し、所有・表象するようになる自我と、自我を＜存在＞へと根づかせ、＜存在＞に引き戻す自己とである。＜私＞が構成する世界の中で、＜私＞がさまざまな対象を自由に享受しているとき、自我は自己の存在（また、それに繋がる＜存在＞そのもの）を忘却している（【図1】）。しかしその享受が挫折すると、自我は自己へと回帰する。レヴィナスはこの享受の挫折、自己のめざめに＜私＞の苦痛を挙げている。＜私＞が苦痛を感じる時、＜私＞は自らの存在を他人と交換しえない以上、＜私＞はたった一人でその苦しみを引き受けなければならない。苦痛は苦しむ自己自身から逃れることができないがゆえに苦痛なのである。このような誰も＜私＞の存在に取って代わることができず、＜私＞は自己の存在から逃れることができないという事実（＝自己自身への繋縛）は、レヴィナスによると＜私＞の存在論的孤独を表している（【図2】）。

ではこのようなく＜私＞の孤独を乗り越えるにはどうしたらよいか。レヴィナスは、「絶対的に他なるものである何ものかと、他者性〔他性〕を備えている何ものかと、とはいえ、われわれが享受を通して同化し得るような一時的な規定としての他者性を備えた何ものかではなくて、その実存そのものが他者性から成っているような何ものか」〔Lévinas:1948=2012:65〕との関係が必要であるという。レヴィナスによると、そのようなく＜私＞の孤独に出口を穿つ絶対的に他なるもの（absolument autre）とは、＜私＞の死である。＜私＞の死は、さまざまな対象を自由に享受し、所有し、表象することによって構成される＜私＞の世界の外にある。つまり＜私＞の死は、＜私＞がいつさい認識しえず、理解もできず、支配もしえない絶対的に他なるものなのである。しかしレヴィナスはすぐさま次のように問い直す。死は、「それが孤独に出口を穿つとしても、それはただ単にこの孤独を打ち砕き、主観性そのものを打ち砕くことにしかならないのではないだろうか。〔中略〕存在者は、他者によってその自己自身を打ち砕かれることなしに、他者との関係に入り込み得るのだろうか」〔Lévinas:1948=2012:69〕。

【図1】



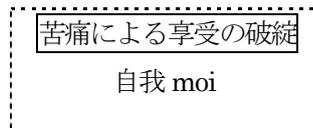
: → 自己の忘却

(自己 soi)

:

(存在 il y a)

【図2】



| → 自己自身への繋縛 ⇒ 存在論的孤独

自己 soi

:

(存在 il y a)

2. 顔の呼びかけ

中期の『全体性と無限』〔Lévinas:1961=2005,2006〕では、＜私＞の死とは異なる絶対的に他なるものとの関係が探られる。先に見たように＜私＞の苦痛とは、自己の存在から逃れることができないという、根源的な孤独の体験であった。究極の苦痛＝孤独の奥底から、＜私＞は他者へと助けを呼びかける。しかし、この呼びかけによって＜私＞がみずからの失った享受の回復をめざしているかぎり、＜私＞が呼びかける他者は、＜私＞の享受のエゴイズムのなかで＜私＞に同化されてしまい、絶対的に他なるものとはならない。

では＜私＞に同化されない他者とはいかなるものなのか。レヴィナスは「顔において＜他者＞が、絶対的に他

なるものが現前する」[Lévinas:1961=2006:51]と述べる。すなわち、絶対的な<他者 (Autre, Autrui)>はまっすぐに直接的にその顔 (visage) において<私>の前に現れる。顔において顕現 (épiphanie) する<他者>として、レヴィナスは貧者、異邦人、寡婦、孤児などを挙げているが、それらはいずれも無力と悲惨を体現している。それらは<私>が助けを呼びかける他者ではなく、<私>に助けを呼びかける<他者>なのである。

<他者>の顔は、<私>が望むか望まざるかに関わらず、<私>に<他者>と関係を結ぶことを強要する。つまり<私>には<他者>の顔の呼びかけを受け取るか否か、受信者になるか否かを自由に選択することはできない。このようにレヴィナスにおいて責任 (responsabilité) とは、<私>の選択以前に<他者>から<私>に向かう呼びかけによってすでに成立している。したがって、<他者>の顔の呼びかけを否応なしに受信した<私>には、二つの可能性しかない。呼びかけに応答し<他者>を迎え入れるか (= 歓待)、呼びかけに応答せず<他者>との関係を拒絶するか (= 暴力)、すなわち責任か無責任か、である。

ところで<私>は苦痛による孤独から他者を求めていたのであった。しかし<私>から他者に向かう呼びかけは<私>の孤独を救わない。ではどうすればよいのか。レヴィナスによると、<私>の孤独は、みずからの失った享受の回復をめざしている<私>にとっては原理的に望ましくない<他者>への責任ある応答によって初めて、しかも無限に突破されるという。「それは命がけの跳躍なのであって、その跳躍の危険に充ちた空間は忍耐 (これが苦しみの意味である) によって開かれ」[Lévinas:1961=2006:153]る。しかしながら、<私>の苦痛と<他者>への責任は、はたして両立可能なのだろうか。

3. 他者の苦痛への苦痛

苦痛のさなか、<他者>の呼びかけをなぜ<私>は受け取るのか、どうして無視することができないのか。後期の『存在するとは別様に、あるいは存在することの彼方へ』[Lévinas:1974=1999]において、レヴィナスは感受性の解釈に変更を加える。レヴィナスによると、<私>は<私>の苦痛を感受するだけではない。<私>は<他者>の苦痛をも感受する。ここに至って苦痛とは、<他者>の顔の呼びかけへの感受性、<他者>の苦痛に対する<私>の苦痛となるのである。そのような感受性をレヴィナスは可傷性 (vulnérabilité) と呼ぶ。

極度の苦痛という逆境のなかでさえ、<私>の意に反して (malgré soi)、<私>は<他者>の顔の呼びかけに、<他者>の苦痛に苦しまないではいられない。もちろん、苦痛に喘いでまったく余裕のない<私>は、助けを求める彼 (彼女) から眼を背けたり、彼 (彼女) を斥けたりするかもしれない。しかしその後、彼 (彼女) が死に至ったら<私>には悔いが残るだろうし、誰かに救われたのであったとしても彼 (彼女) を斥ける瞬間に抵抗を覚えるだろう。<私>は<他者>の顔に無関心 (non-indifférence) ではいられない。他者の苦痛と自分の苦痛を天秤にかける以前に、<私>は常にすでに<他者>の苦痛に苦しみ始めている。つまり可傷性は、<私>の意識化以前に<私>の感受性のうちに刻み込まれているのである。このように、「後悔」や「抵抗」の根拠とは、<他者>の呼びかけを<私>がすでに否応なしに受け取ってしまっており、歓待を求められながらも、それを暴力によって切断してしまったことにあるのである。

このように<私>の意識化以前に<私>の自己が、常にすでに<他者>の苦痛や悲惨によって触発されている主体の主体性を、レヴィナスは「同一の中の—他 (l'Autre-dans-le-Même)」、あるいは「他—のための— (l'un-pour-l'autre)」と言い表す。レヴィナスは次のように述べる。「自己への再帰のこのような受動性は、自我が他人たちの身代わりになること以外の何でありえようか。とはいえ、身代わりは疎外ではない。なぜなら、<同>のなかの<他>とは、代替不能な者として私を召喚する責任に即して、私が他人の身代わりになることだからだ。[中略] このとき疎外が生じることはない。そうではなく、<同>は<他>によって息を吹き込まれるのだ。このような吸気ないし靈感が心性である。それゆえ心性は、「みずからの皮膚の内側にあること」として、「みずからの皮膚の内側に他人を宿すこと」として、同を疎外することなき同のなかの他性を、受肉の相のもとに意味

しうるのだ」〔Lévinas:1974=1999:266〕。

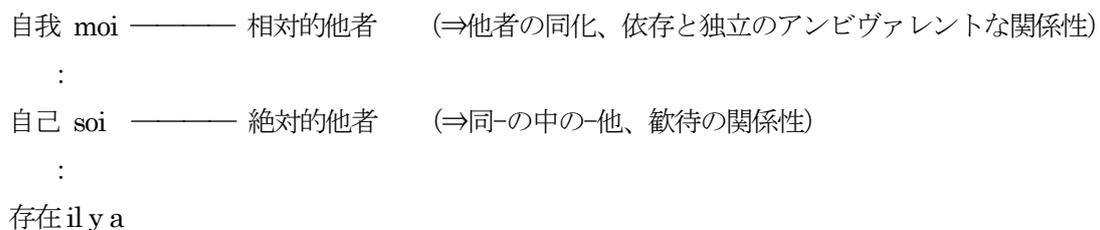
つまり、「同一の中の一他」とは、〈他者〉の顔の呼びかけに責任をもって応えることができるのは、〈私〉の他に誰も取って代わることができない、というこの唯一性 (l'unicité)、または単独性 (singularité) を意味する。このとき、〈私〉は〈他者〉をみずからに同化することなく歓待している。そして、〈他者〉によって触発されている〈私〉は、存在論的孤独 (=自己自身への繫縛) から解き放たれているのである。

おわりに

一般的なコミュニケーションは、主体と他者との相互作用において成り立つと考えられている。他者は主体の行為を自分のうちで想定し、それに対応する行為を返す。同様に、主体は他者の行動をなぞりながら他者へ反応を返す。すわなち、他者は自らのうちに主体を反映する存在だといえるだろう。したがって、他者という鏡に映った〈私〉を主体と認めるならば、〈私〉は他者を通して主体を形成していることになる。このように〈私〉が他者に由来し、逆にまた、他者が〈私〉に由来するのであれば、自己意識と対他意識は同じものの両面となる。レヴィナスの言葉でいえば、ここでの他者は、互いが互いにみずからに同化しうる相対的な他者となる。このような状況において、〈私〉は鏡である他者に依存していると感じると同時に、鏡である他者から支配されていると感じるために、その支配から免れようとして他者を攻撃することになるだろう。日常的に、私たちはこのような他者への依存と他者からの独立のアンビヴァレントな関係のなかで過ごしているのである。

しかしながら、本論で述べてきたレヴィナスの存在論的孤独とそれを乗り越えるための歓待の議論は、私たちが一般的に考えている相対的な他者との関係性 (依存と独立のアンビヴァレントな関係性) とは異なる、絶対的な〈他者〉との関係性 (歓待の関係性) があることを明らかにしている (【図3】)。つまり、存在論的孤独のなかで苦しむ不登校の児童生徒たちは、このような新しい〈他者〉に開かれる可能性を持っているのである。そして、またこのような存在論的孤独の向こうに開かれる新しい〈他者〉関係が生起し得る場を創り出すことこそが、不登校児童生徒への支援の新たな展開に繋がると筆者は考えている⁽⁵⁾。

【図3】



◆註

- (1) 文部科学省の定義によると、不登校とは「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくてもできない状況にあること (ただし、「病気」や「経済的な理由」によるものを除く)」をいう。また、文部科学省の「平成 18 年度不登校実態調査」では、不登校の傾向を「無気力型」「遊び・非行型」「人間関係型」「複合型」「その他」の5つに類型化している。
- (2) 文部科学省ホームページ「平成 27 年度学校基本調査の速報について」平成 27 年 8 月 6 日。
- (3) 斎藤の定義によると、社会的ひきこもりとは「社会参加をしない状態が 6 ヶ月以上持続しており、精神障害がその第一の原因とは考えにくいもの (ただし「社会参加」とは、就学・就労しているか、家族以外に親密な対人関係がある状態を指す)」をいう。

- (4) 文部科学省ホームページ「不登校児童生徒への支援に関する中間報告」平成27年9月7日では、民間やNPO団体のフリースクールやフリースペースなど、学校外の様々な教育機関との連携が提示されている。
- (5) 具体的な支援の内容については、東京都にある武蔵野東技能高等専修学校の取り組みに関する論考を、現在執筆中である。

◆引用・参考文献

- Emmanuel Lévinas, *De l'existence à l'existant*, J.Vrin, Paris, 1947 (『実存から実存者へ』西谷修訳、講談社学術文庫、1996)。
- Emmanuel Lévinas, *Le temps et l'autre*, Fata Morgana, Montpellier, 1948:1979 (『時間と他者』原田佳彦訳、法政大学出版局、2012 (新装版))。
- Emmanuel Lévinas, *Totalité et Infini*, Martinus Nijhoff, La Haye, 1961 (『全体性と無限』(上)熊野純彦訳、岩波文庫、2005)。
- Emmanuel Lévinas, *Totalité et Infini*, Martinus Nijhoff, La Haye, 1961 (『全体性と無限』(下)熊野純彦訳、岩波文庫、2006)。
- Emmanuel Lévinas, *A' autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, Martinus Nijhoff, La Haye, 1974 (『存在の彼方へ』合田正人訳、講談社学術文庫、1999)。
- 港道隆『レヴィナス—法 - 外な思想』(現代思想の冒険者たち 16) 講談社、1997。
- 熊野純彦『レヴィナス入門』ちくま新書、1999。
- 作田啓一「孤独論」『Becoming』N0.1、BC出版、1998。
- 作田啓一「真の自己と二人の大他者—ラカンとレヴィナスが交わる点」『Becoming』N0.6、BC出版、2000 : 『生の欲動』みすず書房、2003。
- 亀山佳明「真の自己と大文字の他者」『自己・他者・関係』(社会学ベーシックス 1) 井上俊・伊藤公雄編、世界思想社、2008。
- 斎藤環『社会的ひきこもり—終わらない思春期』PHP新書、1998。
- 斎藤環『ひきこもりはなぜ「治る」のか?』ちくま文庫、2012。